
お嫁さまの条件

山内 詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お嫁さまの条件

【Nコード】

N0031Z

【作者名】

山内 詠

【あらすじ】

社長からの突然の呼び出しで、お願いされたのはなんと有名俳優とのお見合いだった。三十路地味OL幸子のお見合いから始まる恋物語。

0 三十路女の眩き

私、坂本幸子、サチコと書いてユキコはついこの間、30歳になった。

29歳と30歳、そこには深くて大きい河が流れていると思っただけけれど、なってみればなんてことはない。そんな境目はひょいっとひと跨ぎすれば通れる小川のせせらぎのようなものだった。

30歳って、子供の頃はもっともっと大人だと思っていた。

当たり前みたいに結婚して、子供がいて、もしくはバリバリと仕事をしていた、自立していた。

ぼんやりと思い描いた未来予想図通りに暮らしていると思っただけでも実際なってみれば、何にも考えていなかったような頃から大して成長していない自分がいる。

仕事はそこそこ、結婚どころか恋人もいない、実家でお気楽なパラサイト生活。

学生の頃はどうかあがいても同じ場所に居続けることなんてできなかった。

6年、3年、そして4年と期限がくれば出ていかなきゃいけないから、否応なしに変わっていく自分を受け入れなくてはならなくて。

受け入れなければ、家に引きこもるしかない。

そんな風に何もかもを投げ出すほど怖がりでも絶望してもいないから進むしかないんだ。

ただ社会人になってルーチンワークに埋もれていると、成長なんて、変化なんて感じられない。

毎日、毎年、同じことの繰り返し。経験をただ積み上げていくだけ。

去年のことも、一昨年のことも、一緒くたにして流れていく。そうして結局何一つ、変わってなんかいないのだろう。

だから年齢なんかで区切れるものか。

でもこれは通った後だから、言えることなのかもしれないとも思う。世紀末に世界が滅びなかった時に似ている。あんなに大騒ぎしていたのに、何にも起こらなかった時に。

半信半疑なややこしい心理。ある意味開き直りに近いのかも。

だって放っておいても悩むお年頃よ、20代なんて。

恋愛から遠ざかれば結婚からはますます遠ざかる。素敵な人はどんどん綺麗な女の子と片付いていく。

さらに新卒で入社した会社は居心地だけは悪くないけれどキャリアなんて夢のまた夢みたいな所だったから、余計に迷いは深かったかもしれない。

……なーんてね。

正社員として採用されただけでも十分だってわかっています。

愚痴を言える程学生の時努力したか？ と問われれば答えは否だ。

でも「この会社じゃなく、どこか」なんて、私だけじゃなく、社会人という立場に慣れた人ならみんな考えることだと思っ。

天職に巡り合えたり夢を仕事にした人じゃなければ、隣の芝生は、とーっても青く見えるものなのだから。

転職市場に出回るのなら、早いうち。

なんて考えながら耳触りのいい資格をいくつか取得してみたりなんてしているうちに、海の向こうの証券会社の倒産からあつという間に100年に一度の大不況。

就職したての頃も不況だったはずなのに、景気の底ってどこにあるのかって澄ました顔してテレビの中で解説している経済学者を問い

詰めたくなる。

若いうちの苦労は買ってでもしろ、なんて言葉の重みを実感するのは、若くなくなってからなんだよね。

変化がないことが不安で、同じことに怯えて、立場や環境が変われば何かが解決してくれると信じてしまう。

弱くて、不安定な10代の頃と何が違うの？

何をもって、成長と言うの？

迷って悩んでうだうだして、そうこうしているうちに、30歳。

あつという間だ。

変わりたいとは思っても、変われない、変わらない。

そんなどこにでもいる三十路女だった私の人生は、30歳になったことでなぜか回り始める。

ハリケーンカトリーナも真っ青な、大嵐の来襲だった。

1 突然の呼び出し

始まりは、一本の電話だった。

「坂本さん、内線2番。総務課長から」

「あ、はい」

総務？ 何かあったっけと思いつつも伝票を確認していた手を止めて、電話を受ける。

「もしもし、お疲れさまです、坂本です」

「お疲れさまです、総務高野です。今日業務は立てこんでいますか？」

ちらつと脇に積まれた書類を見る。今日は別に急ぎの仕事は無いし、順調に行けば定時には帰ることができるだろう。真つ先に仕事の具合を尋ねるといふことは、何か時間のかかる手続きでもあるのだろうか。

「いえ今はそれほど。何かありました？」

総務課になんて、年末や期末の手続き以外に用事など思いつかない。

「いや少しお話ししたいことがあります」

14時に第三会議室まで来て頂けないでしょうか？ 1時間程度で終わる予定なのですが」

「あ、はい。大丈夫です」

『ありがとうございます。では14時によろしくお願いします』

「わかりました。よろしくお願いします」

受話器を置いた後、しばし考える。

第三会議室は7、8人も入れればいいの少人数用のスペースだ。そこに総務課長からの呼び出し。

……これってもしかして、人事異動？

ウチの会社そう大きくないので、総務課が人事関係の業務も請け負っている。でも今のところ他の部署で欠員が出たという話は聞かないし、直属の上司からも何にも言われていない。

首をひねりながらも1時間程席を外す旨周囲に伝え、第三会議室へと向かうとそこには総務課長以外の人もいた。

「じゃ、社長！」

「はいどうも、ご苦労さまです」

「お、お疲れさまです」

なんとウチの会社の社長、だった。

大した会社じゃないけれど、それでも雇い主には変わりない。普段仕事じゃほとんど顔を合わさないし。わざわざ総務課長を通じて社長からの呼び出しっていったい何？

もしかして私、何か悪いことした？

「まあどうぞ、話は座ってから」

頭を良くない想像が駆け巡ってかちんこちに固まってしまった私は、促されてなんとかよろよろと椅子に腰かける。すかさず、総務課長からプラスチックカップに入ったコーヒーが差し出された。

心を落ち着けようとミルクだけ注いで、マドラーでぐるぐると念入りにかき混ぜ一口飲む。うん、いつものコーヒーだ。社長も同じようにコーヒーに口を付けている。

よし、驚きは治まった。さあ、クビが異動か、なるようになりやがれ！

「そ、それで、お話と言うのは」

社長がカップをテーブルに置くタイミングを見計らって、こちらから口火を切った。

「ああ、うん、まず仕事の話ではないから。だからリラックスして聞いて下さいな」

「は、はい」

「つか社長と仕事の話以外の何を話すよ？ まあでも一応かちこちだった身体からは幾分力が抜けてくれた。

「えーとね、それと、これセクハラとかそういうのではないから。だからほら、高野君にも同席してもらっているのだけねど」

「はあ」

最初にセクハラの確認って、ますます何なの？

「坂本さん、結婚の予定はある？」

「はあ？」

結婚、と言われてやっと、セクハラ云々の確認理由を理解する。

以前年配の社員が彼氏はいるのか、なんて気にする人は気にすることを派遣の女の子に言ってしまったことがあった。その子がすぐさまセクハラだなんだとか喚きたてて、結構揉めたんだよね。

ウチの会社は社内恋愛に寛容なせいかな、そういう社内ゴシップが皆大好きだ。

さらにいい意味でも悪い意味でも昔堅気で、絵にかいたようなオジサンたちのちよつとしたからかいなんてものは、もう30歳の大台にのっちゃった私だけじゃなく女性社員全員が慣れたもの。

だから皆騒ぐほどのことでもないとは思ったけど、その派遣の女の子はどうしても許せなかったらしく、散々に喚き立て、味方がいないとわかるとすぐさま辞めてしまった。

派遣会社の営業さんが菓子折りもって謝罪に来てたはず。

やたら豪勢な菓子だったから全く関係のなかったウチの部署までお裾分けが回ってきて、それで印象に残っていたのだ。

「いや、ありませんが」

「付き合っている人は、いるのかな。正直にお願い」

「い、いません」

何この質問タイム。

「結婚したいなっていう気持ちはある？」

「一応はあります。ですが、まず相手がいないと始まりませんので」

ここ数年、彼氏どころかデートもない。度々誘われて合コンは行くけど……こなして終わりだ。楽しく飲んではい終了って感じ。

そんな私の寂しい返事を聞いた社長は、なんだか嬉しそうに声を弾ませて言った。

「じゃあ坂本さん、お見合いしない？」

1 突然の呼び出し（後書き）

高野課長はムーンライトノベルズ作品に登場しております。

2 思いがけない依頼

「はあ?!」

社長相手とは思えないような声を出してしまった。いかんいかん。

「すっごくいい相手なんだよ! 是非! お願い!」

しかし社長は私の間抜けな返答など全く気にせずこの通り! とばかりに両手を胸の前で合わせて頭まで下げて見せる。
なんなんだ、一体?

「いや急に言われても……わたしよりもっといい条件の子、いると思います。

例えば、営業一課の鈴木さんと佐伯さんとか若くて美人の方が……」

自分で言うのもなんだけど、私はもてない。

一重の目はどんなにメイクを頑張っても大きくは見えないし、面長でさらに167cmと背も大きいせいも昔から老けて見られる。

16歳の時、ノーメイクで出かけた駅ビルでクレジットカードの勧誘を「学生だから」と断ったら「大学生でも大丈夫!」と太鼓判を押しされたくらいだ。

最近ようやく実年齢と外見が一致してきたように思う。まあ要するに、ずっと三十路顔。

なんとか頑張つて男性とお付き合いまでこぎつけても全く長続きしない。

つままない、重い、ブス……一通り男の人から言われてショックなことは言われている。

そんな私に比べて営業一課の事務二人は他社でも評判の、我が社のツートップと言ってもいい存在だ。

社長がお願いなんて言うくらいに相手だから、取引先から頼まれたとか、そういう義理とか絡んでいるものだろうし、会社の信頼に関わるのなら綺麗どころをお願いした方がいいと思う。

鈴木さんはかつちり系の服装が良く似合うすっきりとした和風美人で、佐伯さんは密かに『ハンター』なんて呼ばれているグラマー美人だ。恋多き人で社内の若い男は佐伯さんに一度はふらつといったことがあるだろう。

社内情報網によると、確か二人とも今のところフリーのはずだ。

「ああ、鈴木さんは今度結婚するの」

「えっそうなんですか!」

一課の鈴木さんがガード固いと有名だったのは彼氏がいたからなのか!。

前に突然右手薬指に指輪をしてきた時に相手が出来たのでは? っ
て噂になっていたけれど、本人が否定してたからうやむやになって
いたんだよね。やっぱりかーなんて勝手に納得していたら社長が含
み笑いをしながら暴露してくれた。

「高野さんになるのよー」

「高野さんって……もしかして!」

社長はにやにや笑いながら隣に立つ人を見やる。総務課長の名字は
高野だ。

「上手くやったよねえ、高野君。若い子捕まえて」

「はあ、まあ」

眼鏡のずれを直すとみせかけて顔を隠した総務課長の頬は先ほどと比べるとちよつと赤い。

うっわあ、総務課長と営業のマドンナ結婚ですか！

これは久しぶりのビックカップルじゃないの。いいネタゲット！

「じゃあ佐伯さんは……」

ここだけの話しだけどね、と社長が片手で口元を覆いながら声を潜めて身を乗り出してきたので、つつい釣られて私も身を乗り出した。

「二課の三浦君と付き合ってるんだって」

「ええええええ！」

「坂本さん、いい反応するねえ」

社長が嬉しそうに言う。ああ、誰かに言いたくてたまらなかったんだろうなあ。いやその気持ちわかりますよ。

あの二人、仲がいいって話は聞いたことあったけど、付き合ってたつてのは未確認情報すぎる！

うわ、今日の三時がおやつ楽しみだ！

「……社長、話が脱線し過ぎでは？」

声に含まれる棘を隠さずに、総務課長が社長を咎める。

……社長が好きだから、社員もこついつ恋話好きなんだね、きつと。

「あ、まあ、そんな感じでね、結構皆さん相手がいるみたいなんだよ」

こほん、と咳払いをして、居住まいを正した社長が話を続ける。

「彼氏とかいる子に無理やりおススメするのはねえ。」

それこそセクハラじゃないかなと思って。だから先に確認させてもらった訳です」

「でも、他にも独身はいると思いますが」

「それがね……」

社長がちらりと総務課長の方を見ると、総務課長が苦笑いしながら説明してくれる。

も、もしか私以外全員に相手がいるってか！？

それ、いくら私のもてない女だからって、地味にシヨックなんですけど……。」

「我が社に在籍している女性社員の内、独身なのは坂本さんを含めて12名おります」

「はい……」

「安心していいですよ、坂本さん。その全員にお相手がいるわけではないようですから」

わ、私の頭の中、お見通しですか総務課長！

「ただ今回のお見合いにつきましては、少々事情があまりのようで
「事情、といたしますと」

ここで社長が言いたくなさそうに斜め上を見る。随分都合が悪そう
だ。

「相手がね、私の後輩なんだ。」

社長は確か44歳のはず。

今年の新年会の挨拶でぞろ目でめでたいけど4だから不吉かもしれないなあなんて言ってたから覚えている。ということは社長の後輩
つて、若く見積もっても40前後？

その年齢で見合いつて。……いや逆に見合いしか手立てはないか。

「……社長、失礼ですが、先ほどすつごくいい相手っておっしゃい
ませんでしたか？」

「年齢以外は完璧と言ってもいい相手なんだよ」

年齢以外完璧！？　ますます怪しい。

「じゃあ総務の村瀬さんはいかがですか？　年齢近いですし」

村瀬さんは40代で×イチだけど子供はいない。

「うーん、大きな声では言えないけれど、相手が初婚の方を希望し
ててね」

「おいおい、40代で贅沢な話だな。」

「どうだろう。受けてもらえないかね。」

社長がまるで縋るように私を見る。

「なんでこんなに必死なんだろう。よっぽどこのお見合いを断れない理由があるのだろうか。」

「……会うだけなら。お断りするか、お付き合いするかは私が決めて構わないでしょうか？」

社長の眼力に根負けして、承諾してしまった。

くそっ、普段はメタボなお腹を揺らしていてもやはりトップに立っているだけあるぜ。

まあ仕事だと思えばどんな男が来てもまあなんとかあしらえるだろう。伊達に年は食ってませんので。

「もちろんだよ！　ありがとう！」

感激を押えきれないとばかりに、社長が右手を私に向かって勢いよく差し出してきたので、慌てて握り返すとぶんぶんと子供のようになり回される。テ、テンション高いなあ。

「大丈夫、会ったら絶対に断ろうなんて思わないから！」

社長の自信満々なその言葉に、私は困惑しつつもどんなに完璧な男が来るのか逆に少しだけ楽しみになってしまったのだった。少しだけ、ね。

「詳しいことは高野君からメールしてもらおうから！」

じゃ、あとよろしく！ とご機嫌で社長は去っていく社長を会議室の前で見送る。

コーヒークップを片づけた後、エレベーターを待っていると、不意に総務課長が口を開いた。

「……先ほど聞いた話は、内密にしておいてくださいね」

ちらりと横にいる総務課長の顔を見れば、口元には笑みが浮かんでいるけれど、目は全然笑っていない。

「……了解しました」

やっぱり、駄目でしたか。せつかくのスクープ情報だったのに……。

2 思いがけない依頼（後書き）

鈴木さん、佐伯さん、三浦さんはムーンライトノベルズ作品に登場しております。

特に佐伯さんと三浦さんのお話は別に番外編として書く予定。

村瀬さんはサイト限定公開作品「エンドオブザワールド」にちらっと登場しております。

3 待ち人は

社長という職業は、フットワークが軽くないと出来ないのだろうか。何しろあの面談？ から3日後にはもうお見合いの詳細が示された社内メールが届いた。

日時と場所の詳細を確認しながら、思うことはまあ、ひとつだけ。

一体どんな男ひとなんだろう。

社長の後輩、ということしか聞いていないから、どうやっても豊かなお腹の人しか想像できない。

後輩ってことは学生時代の知り合いだろう。大学？ それとも高校？ まあいい、ただ会うだけだ。

場所として指定されたのは、都内のホテルのラウンジ。2週間後の日曜日、時間はなんだか中途半端な16時。双方付添人無しだから、気兼ねは無い。

いつそのことかっぽーんと鹿威しが風雅な音を立てるお庭があるような料亭だったらよかったのにな。

いかにもお見合いって感じがするじゃない？ 美味しいご飯も食べられそうだし。

でもそんなことしたら私は振袖とか着なきゃいかんのか。

三十路で振袖……。

成人式の着物なら一応持っているけれど、さすがにもう無理があるわな。

私の今日の格好は無難にグレンチェックのAラインワンピースにオフホワイトのジャケット姿。

どうせ私が断らなくても相手から断ってくるだろう。

だけど礼儀としてトイレで最終チェック。

磨かれた鏡の中に映る私は、相も変わらず地味で若くない女だ。

足音を吸い込むようなカーペットを踏みしめてラウンジへと向かうと、背筋を伸ばしたスタッフが出迎えてくれる。

「いらっしやいませ、お一人様でいらっしやいますか？」

ええ、普段はおひとりさまなんですけどね。

「いえ、待ち合わせで。小田桐で予約が入っているはずですが」

小田桐は社長の名字だ。

結局相手については全く教えてもらえてない。

年齢以外完璧というのだから、お金はあるとかそういう人なのかなと予想したけれど、どうだろう。

「かしこまりました、どうぞこちらへ」

このラウンジにはアフタヌーンティーを楽しみに以前来たことがある。

チョコのスクーンに添えられていたラズベリージャムが合っていてすごく美味しかったなあ。今日も頼んじゃおうかな。お見合いで、三段のティースタンドって有りかしら？

案内されたのは、観葉植物と照明で他の席とは仕切られた半個室のような席だった。これじゃせっかく綺麗な窓からの景色はあんまり楽しめないんじゃない？ と一瞬思ったけれど、今回のメインはお茶じゃなくってお見合いだ。

ならこうい席の方がいいものかもねと思い直す。

こちらに背を向けて、既に誰か座っている。

マナー通り5分前に来たけど、どうやら相手はもう少し早く来たようだ。

「お連れ様がお見えです」

「ああ、ありがとう」

さして大きくないのに随分響く声だな、と思った。通る、という感じが近い。低くて耳に残る。

座っていた男性が立ち上がり、最初に感じたのは、背が高い、ということだった。がっしりとした広い背中に、メタボな社長の印象はいつぺんに吹き飛ぶ。

そしてゆっくりと振り返った姿に、思わず呼吸が止まった。

大丈夫、会ったら絶対に断ろうなんて思わないから！

社長の言葉がフラッシュバックする。

だってだって、そこにいたのは多分日本中の誰もが知っている、そのくらい有名な。

俳優、榊浩司だったのだ。

榊浩司と言えば、舞台出身でテレビドラマや映画で大活躍、アカデミー主演男優賞も受賞しているはず。

ついこないだまで放送されていた検事のドラマ、めっちゃ見てたよ！
そ、そんな大スターが、なんでこんなところにいるの？

「どうも、初めまして」

「あっ！ はい、初めまして」

声を掛けられて、ようやく我に返る。米つきバツタのように慌てて頭を下げた。

今私ものすつごく間抜けな顔をしていたと思う。

いや、待て、落ち着け私。ただ似ているだけかもしれない。というか、別人でしょ。

そんな簡単に大スターに会えるわけがないじゃないか。しかもウチの社長のご紹介のお見合いなんかで。

「今日はよろしく願います」

「はっ、いえっ、こちらこそっ」

席に着いて改めて目の前の男性を見る。なるべく凝視しないように、顎のあたりに視線を合わせて、こっそりと。

やっぱり、見れば見るほどテレビや映画で見たことのある榊浩司その人だ。

顔かたちは一見すつきりと整っているのだけれど、そこに感じるのは美しさや甘さではなくもっと激しくって強いもの、例えるならば剛毅であるとか、武骨と呼ぶのがしっくりくると思う。

視線を引き寄せられてしまうのは、やっぱり目だ。鋭さを宿した瞳がただでさえ強烈な印象に、さらなる力を加えている。

だけど目尻と涙袋に少しだけ寄る皺は、まるで元々は野性的で荒削りだったものが年月と経験という名の研磨を経たことで穏やかさを纏わせているように見えて。

……まあ要するに、とびつきりいい男ってことなただけ。

ただ精悍さを漂わせたい男ってだけじゃなくて、渋い大人の色

気がむんむんです。

普通に座ってるだけなのにものすっごく絵になる。

よく芸能人にはオーラがあるとかいけど、確かに、ただのイケメンじゃ絶対に醸し出せないものを全身から発している。

多分、本物。

ていうかこれが偽物とか良く似ている人だったら本物はどんだけすごいんだって話になっちゃう！

私が座って一呼吸置いたのを見計らったようにスタッフがメニューを持って現れた。

「お話の前に何か頼みましょうか」

「あ、はいっ。じゃあ私は、シングルエステイトアッサムで」

とりあえずメニューを開いて、すぐ目に付いた紅茶の名前を口にしました。彼はアメリカンコーヒーをオーダー。

注文が済むと一転、沈黙が通りすぎる。遠くにピアノの音が聞こえるけれど、今はとてもとても楽しめるような状況じゃない。

4 とりあえずお茶を

「改めまして、榊浩一と申します」

口火を切ったのは、彼の方だった。

あれ？ こういち？ と一瞬思ったけれど、深く考える前に返事をしなきゃと気が焦ってしまった。

「あ、はい、私は坂本幸子と申します。このたびは小田桐からご紹介いただきましたまして」

動揺を隠そうとすると、ビジネスライクな言葉しか出てこない。再び軽く頭を下げる私を、榊さんは軽く手を振って止める。

「いやいや、そういう堅苦しいのは無しにしましょう。そのために二人きりで会っている訳ですから」

「は、はい、わかりました」

顔を上げて目を合わせると榊さんはふつと目を細めた。

ひょええ、笑顔やばい！ 見とれないように咄嗟に視線を逸らすのが精一杯だぜ。

まてまて、これはお見合いだ。平常心、平常心。

「何か、僕に関して小田桐からは聞いていましたか？」

「いえ、何も」

後輩とは聞いていたけれど、それ以外は年齢すらちゃんと教えても

らってない。

「すみません、それに関してはこちらからお願いしたことなんです
よ」

「と言いますと」

「先入観持たれると、困るので」

「先入観、ですか」

まあ確かに最初に相手が俳優榊浩司だって知っていたらもう少し気
合い入れてきたよね。最低限美容室でセットくらいはしたな、うん。

……というか、断ったかも。恐れ多くて。

大スターなんて、遠くから見ているくらいでいいよ。こんな至近距
離に存在されたら心臓に悪すぎるわ。

いやその前に信じなかったな。今も信じられないし。

ふと総務課長の笑っていなかった目が頭を過った。確かに事情、あ
りすぎる。

多分社長の考えていたお見合い相手の第一候補は鈴木さんだったん
だろう。

ただお見合い相手が榊浩司だったら、乗り換えられたっておかし
くない。彼氏なら気が気じゃないよね。

会わせたくなかったら、社長を納得させるしかない。それで今まで
隠してきた付き合いのことをばらさざるを得なかったんだろ。そ
こできつと色々突っ込まれて、結婚するところまで白状したと。あの
社長の様子じゃ相当根掘り葉掘り聞いているだろうし。

今のところ社内に噂は広がっていないけれど、本当は、言いたくなかっただろうな。

鈴木さんは簡単に男を乗り換えたりするような子じゃないとは思いますが、不安だよな。可愛い子を彼女にした男は苦勞するなあ。まあ、幸せな悩みだ。もげてしまえ。

あまりにも見つめたら失礼だろうと視線を顎からさらに落として、喉仏あたりを眺めながら、あの奇妙な三者面談を思い出していたら榊さんが不思議そうに尋ねてきた。

「自惚れていると思われるかもしれませんが……坂本さんは僕をご存知ですか？」

へ？ 何当たり前のことを訊くんだ？

「はい、存じ上げております」

「何か疑問、お持ちになりませんでしたか？」

「いえ、特に」

と言った後にそういえば名前が違ったなと思に至る。いやそれだけじゃなくて質問疑問はてんこ盛りですよ。社長とはどういう先輩後輩なのかとか、そもそもなんでお見合いなんぞしてるのかとか。

でも一旦無いつて言った後やっぱりありますってのもなんだか間が抜けている感じがして、黙って涼しい顔を作ってみる。あれこれ訊いてミーハーっぽく思われるのもなんか嫌だし、というのはいい訳で、上手く口が回らないだけ。

いつもこうだ。頭の中ではぐるぐるいろんなことを考えているのに、言葉に出来ない。

まあいい、こちらが何も知らない以上、主導権は最初から向こうにある。

「お待たせしました」

そうこうしているうちに、注文していた品物がやってきた。

ポットに入った紅茶を茶漉しに通して注ぐと、ふんわりといい香りが漂う。

なみなみには注がないで、7分目まででストップ。

アッサムはストレートで飲むにはちよつと濃い。だけどその濃い中に甘みがあるから、ミルクティーに合うんだよね。

思わず口元が緩む。紅茶は好きだけど、普段はもっぱらティーバッグだ。1杯1000円超えるお茶なんて、そう度々は楽しめないもの。

しかもこの茶器はウエッジウッド。自分じゃ絶対に手の届かない美しいカップは、見ているだけでうきうきしてくる。

ところが意識を紅茶へと集中させていた私の耳に、信じられない言葉が飛び込んできた。

「結婚を前提にお付き合いしませんか？」

今日初めて顔を合わせた彼は、嬉々として紅茶にミルクを注ぐ私に突然そう言った。

私はミルク後入れ派なのだ。

とりあえずミルクを適量紅茶に注ぎ、スプーンでよくかき混ぜたあと、一口飲む。うん、美味しい。味覚は正常と。

では聴覚はどうなのだろう。いまひとつ自信がないので問い返してみよう。

「今なんとおっしゃいました？」

「結婚を前提にお付き合いしませんか、と」

微笑んでいる榊さんの前で思いつきり顔を顰めそうになるのを必死で堪えて私も笑みを顔に貼りつける。

ちよつと待て。

まだお互い名前教え合っただけで自己紹介もまともにしておりませんが。

私の家族構成とか仕事を何しているとかは仲介人でもあるウチの会社の社長から聞いているのかもしれないけどさ。それより何よりあなたと私はついさつき、ほんの十数分前に出会っただばかりですよ。いや待て待て待て、この十数分で何かあった？

初対面の男性にお見合いとはいえ速攻で結婚とか意識させちゃうミラクルな難度の技なんて繰り出したりしたっけ？

こめかみに指をあてて考えてみる。

……ぜんっぜん思いつかない！

5 5番目の私

持ったままだったカップをそっとソーサーに戻す。よし、指先は震えていない。震えているように感じたのは、きつと許容範囲を超えた一言のせいだ。

もう少し、時間が欲しい。なんとか心を落ち着けるために。だから質問には答えずこちらから問いかける。

「お申し出にお答えする前に、質問してもよろしいでしょうか」

「どうぞ」

「……もしかして、初めてではいらっしやらないでしょうか？」

うまく回らない頭だけれど、なんとなくそんな気がしたのだ。手慣れている感じと云えばいいか。

自分の素性を隠して先入観を持たれないようにしたってことは、以前失敗したことがあるんじゃないの？

「そうですねえ、かれこれ今回で5回目でしょうか」

やっぱり動揺は隠せなくて、あるうことが主語を抜かしてしまったけれど、どうやら質問は正確に相手に伝わったらしい。

指折り数えながら、榊さんは何のてらいもなくにこやかに答える。

「……そ、それはそれは」

「多いですよねえ」

い、一応自覚はあるわけですね。お見合い5回って、相当じゃない？

「過去4回もお見合いされた理由お伺いしてもいいですか？」

「気になります？」

「ならないとは言えません」

5番目の女としては、当然でしょう。

正直な方ですね、と苦笑すると榊さんは過去のお見合い相手について話し始めた。

どこの誰だとか個人を特定できるようなことはあまり詳しくはお教えできませんけど、と前置きして。

「1人目はね、20歳の大学生さんでした」

「……ちよつとお年が離れてらっしゃいますね」

正確な年齢はわからないけれど、彼は40歳を確実に越えているだろう。なら20歳じゃちよつとどころじゃない、まるで親子だ。

「それもありませんでしたが、まあ、そのお嬢さんよりもお母さんの方が熱心すぎてちよつと、ね」

「ああ……」

「ですよー」。

憧れの俳優が家族になるかも、なんてことになったらそりゃあハッスルしちゃうよねー。

しかも20歳の娘の母ならどんぴしゃの年代だもんねー。
下手したら娘じゃなくて私と……なんてドラマの見過ぎですね、はい。

「2人目は25歳で、普通にお勤めされてました」

「あら、いいじゃないですか」

20歳と25歳じゃどっちも似たようなもののように感じるかもしれないけれど、女の5歳は男の10歳って言っじゃないか。20歳差と15歳差だったら後者ならギリギリセーフっぽい。まあ人によつてはアウトかもしれないけど。

「こちらは、僕というよりは芸能人の妻というものに非常に興味のある方で」

「ああ……」

その人本人よりも持ち物である肩書に惹かれる人っていうのは珍しくない。どこの大学卒業をしているとか、どこの会社にいるとか。まあ榊浩司と言えば、素敵なルックス以外に、地位や名譽に加えておそらくお金もたくさん持ってらっしゃるでしょうしねえ……。色々持っている人も大変なのね、なんて思うのは何一つ持っていない私の僻みとかじゃないですから。

「3人目も同じような方でね。」

僕自身ではなくて自分を売り込むために結婚したいという方でした。

一般の方だったのですけれどね」

「ああ……」

たまにいますよね。もともとは一般人だったのに芸能人と結婚して嫁の方がしゃしゃり出てくるのって。子役の親とかさ。

芸人さんの嫁とかだったら許せる時もあるけど。ほら、お宅拝見なんかで奥さんや子供が登場するじゃない。あと鬼嫁、とか言っって弱気な旦那さんとセットで出演していたり。

でも榊浩司の奥さんというフレコミでしかも若い子がテレビとか雑誌とかに出てきたら正直私はちよつと引く。

4人目もまあ2人目・3人目と似たような感じだったらしく、それはもうご愁傷様としか言いようがない。

さつきから私の口からは「ああ……」しか出てないよ。

しょうもない女にはっかかり当たってきたのね。もちろん私も含めて。

でも普通四十路男だったら、2人目や3人目のようなタイプの女にはころつと騙されてしまうんじゃないだろうか。そもそも榊浩司の相手なのだから、仲介してくれた人だって下手な女性を紹介しているとは思えない。

頭もよくて顔もいい女の心の真相を見抜ける男なんてそう多くはいないけれど、多分目の前の人は計算高い女の裏側を見抜いてしまう人なんだろう。

「……大変失礼ですがお見合い、向いてらっしやらないのでは？」

いい意味でも悪い意味でも女に騙されないタイプの人は、紹介とかは向いていないと思います。自力で何とかしないと。

「でもお見合い以外に方法が思いつかないのです」

「御冗談を。榊さん程の方でしたらよりどりみどりでしょっ？」

社長の言う通り、年齢以外は完璧なのだ。

あとひっかかるとしたらどこ？ 公務員とか銀行員とか、安定した職業じゃなきゃダメ！ とかいう人じゃなければ問題無いはず。

ところが榊さんは蝋燭の火を吹き消すように浮かべていた笑みを一瞬にして仕舞いこんでしまった。

うん、深刻な顔も大変格好いです。

6 お見合いの理由

「僕は今更恋愛がしたいわけじゃない、結婚して家庭を作りたいんだ」

最初から結婚前提のお付き合いを望むならお見合いするっていうのは、まあ間違っではないですけどね。ご自身の立場とか価値ってものを考えてくれ。

「……職場にお相手に相応しい方々がたくさんいらっしやると思いますが」

それもとびつきりの美人美女ばかり山ほどいるじゃないか。

しかし私の言葉に、榊さんは少しだけ困ったように眉を寄せた。さすがにいちいち行動が男前だな。

「うーん、女優さんは無しなんです」

なんで？

口には出さなかったけれど、私の顔にはでかかど書いてあったと思う。

俳優同士の結婚なんてよくある話というか、ある意味職場結婚じゃないか。

「これは俳優という特殊な職業のせいなのですがね」

「はあ」

わけがわからなくて間抜けな相槌を打ってしまう。

「以前友人が付き合っている女優さんとセックスをすることがあります」

「セッ!？」

紅茶に口付けていなくてよかったよ。危うく吹くところだったじゃないか。

「もちろん演技ですよ。……ですがどうも妙な気分になってしまつてね」

「ああ……」

それは確かになんだか気まずいなあ。

演技なんだから浮気でも裏切りでもなんでもないのだけれど。

気が進まなくても友人の彼女とのラブシーンがあるからという理由で依頼断るのって役者としてどうなの? って感じだしね。

「役と同調して相手に恋愛感情を持つてしまうことは珍しい話ではありません。

実際それがきっかけで付き合ったり結婚したりしている方々はたくさんいますし。

ですが、僕はちょっと無理だなと思つたわけです」

なるほど、それなら無しだわ。

「じゃあ女優さんじゃなくても、周囲には他にもたくさんいらっしゃるのでは?」

「他にも、といますと?」

「タレントさんとか、グラビアアイドルとか、アーティストの方とか。」

あとスタッフの方とか……」

榊さんは苦笑しながら否定を返してきた。

「芸能という時点で同じ世界と思われがちですがね、分野が違つと全然顔も合わせませんよ」

「そういうものなんですか」

そういうものですよと榊さんは頷きながら続ける。

「歌手の方なんてまともに顔を合わせたのは紅白のゲストに呼ばれた時くらいなものです。」

バラエティも宣伝の時期にしか出演しませんからタレントさんともそう会いません。」

スタッフの方とはそもそもそんな色つぽい話にはなりませんし」

はあ、成程。つて納得しそうになつたけど今さらつとすごいこと言つたな! 紅白つて!

そういえば一昨年の大河ドラマ、主演していましたね。はい、私も見ていました。

言葉の意味を飲み込んでから榊さんを見ると、悪戯つぽく口元が上がつている。

……ちよつと色つけましたね、今。さつきからちよいちよいこつちの反応を試すようなことすんなあ。

こつちは素人なんだから、本当なんだかどうなんだか分からない嘘

は止めてくれよ。

「僕に出会いが無いということ、お解り頂けましたか？」

「……それは解りました。ですが私に交際をお申し込みになる理由は全く解りません」

「本当に正直な方ですね」

また苦笑いされてしまった。

私、そんなに正直かな。当たり前のことを訊いたつもりだったのだけれど。

でも榊さんは気分を害した訳では無いらしく、コーヒーを一口飲むと語り始めた。

「お見合いを4回しまして」

「はい」

「さすがに少々懲りてしまったんです。でももうお見合い以外にいい方法も思いつかない」

「そうですね？」

私みたいな地味でもてない女だったらそのセリフすっごく理解できるけど、こんな男前に言われてもなあ。入れ食いだろ、入れ食い。そもそも選り過ぎなんだよ。素直に騙されておけよ、可愛くて若くて知恵のある子にさ。

でも多分、そうなったからすっごくがっかりするけど。

ああ、榊浩司もやっぱり若くて可愛い子がいいんだなあって。

矛盾しているけど、ただのファンとしてはそう思ってしまう。

「そうなんです。お見合い、というから構えてしまっけれど、結局は紹介なわけだから自力で見つけられないのならこれを続けるしかないでしょう?」

「なるほど」

まさか榊浩司が合コンするわけにもいかないだろうしね。でもまあ合コンも友人の紹介だよな。

「ただ流石にこの年齢じゃ条件云々言える立場じゃないと思って、今までは出来れば初婚の方とだけお願いしていたのですけれど、今回5回目にして細かく条件を付けさせて頂いたんです。」

えーと、条件が初婚ってだけって、あなたの立場からすればかなり控えすぎですよ。謙虚にも程があります。本当は条件がたっぷりあるのに、ストライクゾーン広く見せかけたからこうなったわけか。

「その条件にあなたがぴったりだったんです」

どんな条件をつけたら私がぴったりなんですか。

「……その条件とやらをお聞きしてもかまいませんか? 質問ばかりで申し訳ないのですが」

「一生が関わる問題ですからね、質問があつて当たり前でしょう」

「はいー」

私が聞きたいのはずばりそこです、そこ！
ところが榊さんにはっこりと笑いながら、言い切った。

「でも今は教えません」

「な、なぜですか？」

榊さんは答えず、テーブルの上に両肘をついて手を握り、顎をそこに乗せてじつと私を見つめて逆に問いかけてきた。

「お休みはいつも土日ですよね？」

「お休みですか？ まあ、そうです」

「じゃあ再来週の土曜日、デートしましょう」

あの鋭さを宿した瞳がまっすぐに私を射抜いてくる。絡め取られて視線を逸らせない。熱視線ってこういうことを言うのだろうか。じりじりと焦げるような錯覚。
なのにぞくりと背筋に寒気のようなものが走る。

「デ、デートって、どういうことですか？」

「次会った時、先ほどの質問に答えます」

「いや、その」

この話はお断りするつもりなのですが、とはさすがに本人には言えない。
ない。

なんとか逃れようと紅茶を飲んでみる。さっきは美味しいと感じた

のに、今は全然その味がわからない。

こんな風に男の人に意味を込めて見詰められたことなんて数えるほどしか無くて、どうしたらいいのかわからない。

「駄目ですか？」

追い打ちをかけるような低く耳に残る一言に、私は白旗を上げた。

「……わかりました」

ここでノーと言える女はいるのだろうか。いたら無条件で尊敬するよ……。

0 三十路女の憂い

いつか私だけの白馬に乗った王子様が現れる、なんて夢物語を思い描いている訳じゃない。

いくら自分が地味で不細工だからといって、どうせ私なんかって、どっぶり自虐に頭のとっぺんまで浸かって悲劇のヒロイン気取りたい訳じゃない。

不貞腐れて匙を投げたって、自分の人生なんだから、損するのは自分だけだ。

解っている。だけど出来ない。

楽な方へ、楽な方へと流れていく。

甘い甘いお菓子ばかり食べていたら太るって解っていても運動はしんどくて嫌。後で苦労しても今、辛いのはもつと嫌。

つまりは怠惰で、幼稚なだけ。

逃げながらくどくど頭で色々考えていても状況を打開する名案なんか思い浮かばなくて、堂々巡りのように日々を繰り返している。

足掻くように、ほんの少しだけ新しいことを始めたり、古いものを捨てたりしながら。

臆病、なんだ。

決定的に変わるものを求めているのに、足元がすぐわれることを躊躇してしまふ。

だけどそれは今まで何か行動を起こして、良く変わったことなんてほとんどないから。大抵がぼんやりとだけ想定していた悪い方へと転がっていく。

過去の経験は未来の予測に繋がる。悲しいことにそれは大抵外れない。

ああ、やっぱり。

仕方ない。

そんな言葉でどんな時も諦めて受け入れて流して。

だから自分の中にはなにひとつ残っていないのかもしれない。

いつも大きく一步を踏み出せなくてすり足みたいにそろそろと半歩、進むのがせいぜい。

慎重過ぎて、時間を無駄にってしまったのかもしれないって、思う時はある。

あの時に戻ったらきつともっと上手くやれるのにつて。

でも自分であることは変わらないのだから、いくら戻ったって結局やることは一緒じゃないかなとも思うんだ。

だったら、過去に戻りたいなんてそれこそSF映画のようなことを考えないで、前を向くしかない。

ものすごく消極的な考えかもしれないけれど、無暗やたらと全力出せるほどスキルも根性も持ち合わせていないからね。

当たり前みたいに考えていた、絵にかいたような未来はもうあり得ないと解っているから、なんとか今の状態で最善なルートを模索していこうって試みてみる。

自分のレベルはもう重々承知しているから、？望みなんて絶対じゃないよ。

ただ、この掌にちょうど良く収まるくらいの幸せが、欲しいんだ。

それくらいを望むことも、贅沢なのかな。

だったら私は一体、何を望んだら許されるのかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0031z/>

お嫁さまの条件

2011年12月11日09時44分発行